
ムーンコイン

泉 ユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムーンコイン

【コード】

N9108G

【作者名】

泉 ユキ

【あらすじ】

ムーンコインという不思議な力をもったコインを巡るとても不思議な物語。

(前書き)

どうも。初投稿の泉です。

文章がまるでなっちゃんいないですが、
それでも良ければご覧ください。

閏年の十五夜の朧月夜に現れる
それは小金に金光り、
手にしたものは永遠の
強運を手にするだろう。

私の名前は野上瑠衣

今日は四年に一度の閏年の十五夜の朧月。「私のところに伝説の」
インが落ちてこないかなあ」
そう呟くと空にきらりと光る何かが見える。
じっと見ていると何やら流れ星のようにも見えた
だんだん近づいてきている
次の瞬間、周りがピカツと光った
私は目をつぶった・・・

目を覚ますとベッドに寝ていた。

ママが運んだらしい

そして目の前にいたママが怖い顔で言った。

「あのね、瑠衣、こんなものを持っていたの」

お母さんの手の中にあっただのは、

ムーンコイン・・・。

わたしは息をのんだ。

ママは言った

「これはあなたが持ってなさい」

ママの手の中で、全く光らないコインを私に手渡すとコインは、勢
い良く光りだした。

「持って行きなさい。先生には連絡したわ。」

と言った

学校に行く途中、もう変化が起こった。

今まで凶運だった私は、

いつも信号は手前で赤になる。

だが今日は違うすべて青になるのだ

信号の多い道だから、気のせいではない

コインの力で私は早く学校に着いた。

席に着くと何かがない。

そうだ、水着だ。

今日はプールがある日だ。

「今日のプールは、見学かぁー」

落ち込んでいた次の瞬間、

友達のくるみちゃんが、私の水着を持って学校に来た

迎えに行ったら居なかったから、

ママに水着だけ持って行くと言ってくれたらしい。

くるみちゃんに大大感謝だ

命一杯お礼を言った

でもよく考えるとおかしなことだ。

いつもくるみちゃんは迎えに来たりしない。

何で来たのかを聞くと、

「何となく一緒に行きたかったから」らしい

変な気持ちだ。

(もしかしてこれも……)

「ムーンコインの力かもしれない!」

思わず叫んでしまった。

みんなが驚いたように振り返る。

「ムーンコインが何だった?」

同じような質問が何度も飛んでくる。

少しの間黙っていたが私は結局重い口を開いた

「実は、あたし…ムーンコインを持っているの」
シーンと静まり返った

「ふー。何を言い出すのかと思ったたらそんなこと？嘘つくならもつとまじな嘘つけば？」

そう言ったのはいつも毒舌の美沙だ。

「本当なの……。」

私はそつとコインをみんなに見せた。

教室はまた静まり返った。

帰ってくる途中、

ママの車を通っているのを見かけた

話しかけたら一緒に帰ろうと言ってくれた。

歩く手間が省けてラッキーだ。

家に帰る時も信号は全て青で渋滞も無。

やはりこれもコインのおかげなのだろうか？

少し、黙り込んでしまった。

私には、好きな人がいる

仁神卓也君といって、文武両道で人気者。

だから、私の手の届く人じゃない事は、

解りきっていた。

でもそれから一カ月ほど経った頃、

恐ろしいことが起こった。

「前から瑠衣のこと好きだったんだ」

「えっ！」

顔が真っ赤になっている卓也君も格好良い。でもなぜ卓也君が私の

事を？

まさか・・・

横目でちらりとコインを見る。

するとまばゆい光を放ってこっちを見ていた。「やっぱり・・・」

。

「ムーンコインが発動している。」

私は悲しくて、悲しくて仕方がなかった。

次の日、決心をつけた。

私は、ムーンコインを返す。

水面の上の満月に

小金に光る金のそれ、

ムーンコインを投げ入れる

さすれば、それは満月へ

まっすぐ去ってゆくだろう。

「さよなら・・・」

次の日にはみんなコインの事を忘れていた

私は卓也君の前まで行って

「好きです」

告白した。

卓也君は驚いた様子でこっちを見ている

にっこりと笑って、

「僕からこの前言っただろう？」

「お...、覚えているの...？」

「あたりまえだよ。告白したこと忘れる人なんていないよ」

あの告白は本当だった、心から嬉しかった。

コインの力が無くても大丈夫。

薄れゆくコインの記憶のなかで思った。

（ありがとう）

そして私の記憶も完全になくなった。

あの日から数年。

閏年の十五夜の日は、どこか懐かしく

そして暖かい気持ちになる。

卓也君と一緒に・・・。

終わり

(後書き)

最後まで読んでくれた方ありがとうございます。短編ということでこれで終わりですが、

もしもどなた様が、

続きが読みたいという方がいらっしやいましたら、言っていただければもしかすると

番外編を書くかもしれません。

よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9108g/>

ムーンコイン

2010年12月28日02時06分発行